

イスタンブル・ファーティー地区（トルコ）の街頭  
景観における宗教的表象とその多義的解釈  
～景観映像に対する読み取りインタビュー調査報告～

**Religious Representation, and its Ambiguous  
Interpretation, from Street Images of Istanbul's  
Fatih Area (Turkey): A Report of Interviews**

井藤 聖子<sup>1</sup>・山中 速人<sup>2</sup>

Ito Kiyoko and Yamanaka Hayato

After having five Istanbul resident informants of varying religious attitudes view a 10-minute video of the street environment in Fatih's Çarşamba neighborhood, an interview survey was conducted to uncover what kind of religious representation they perceived within the images. The results were as follows. First, images that informants responded to with the greatest frequency and strength were those of Islamic clothing worn by persons in the video. For instance, responses occurred most frequently in relation to women's attire such as the Çarşaf, turban, and cilbab, and men's attire such as the cüppe, sarık, takke, and şalvar. Informants responded next strongly to words and concepts related to Islamic culture as found in shop names, products displayed in shops, and product advertisements and signs. At the same time, there were only two representations of local historical structures that informants responded to: a graveyard and İskender Paşa Cami.

These results suggest that religious representations in this area can be characterized as perceived less often in solid structures and more often in fluid mediums, such as attire, shop goods, and advertisements. The fluidity of these religious representations is a critical element in constructing the religious landscape of a metropolitan Muslim community like Istanbul.

キーワード：宗教的表象、宗教的アイデンティティ、イスラム風俗、街頭映像、映像分析

**Key Words** : Religious identity, Street image, Islamic lifestyle, Visual analysis

---

1 イスタンブル大学文学部シェイマ・ギュンギョル研究室研究調整員（調査実施時点）、文学博士（イスタンブル大学）

2 関西学院大学総合政策学部教授、社会学博士（関西学院大学）

## A. 研究の射程と対象および本調査の目的

### 1. 研究の全体構成と本論文の位置

本論文は、2012～14年度に科学研究費補助金を得て、進められている「可視化する地域社会の宗教／エスニック文化の比較映像分析～大阪生野とイスタンブール」を構成する一部分として、発表されるものである。

この研究を始めるにあたって共有されていたのは、都市のアイデンティティにかかるに文化的表象の可視化が急速に進行しているのではないかという問題意識<sup>3</sup>であった。

この問題意識を背景として、トルコのイスタンブール<sup>4</sup>(Istanbul)・ファティー<sup>5</sup>(Fatih)地区にあるチャルシャンバ(Çarşamba)界限と、日本の大阪・生野界限のコリアン集住地域<sup>6</sup>を対象として選び、それらの地域を共通する一定の手続きにしたがって映像で記録し、その映像を比較分析することによって、可視性を強める地域社会の宗教／エスニック文化の変化を通文化的な位相において明らかにすることを試みた。

開始された研究は2014年度まで継続される。ただ、研究過程で得られるデータは多義的で、多様な手法による分析が可能であり、また、そこから得られる知見は多岐に及ぶものであると予想される。そこで、研究をととして得た知見とその研究成果を、今後、いくつかの論文に分けて、報告することとした。この論文では、ファティー地区で撮影された街頭景観映像に対してイスタンブール在住者を被験者として実施された映像の読み取り

インタビュー調査に関する部分について、その目的と経過、結果を報告するものである。

### 2. 調査の目的

本調査の目的は、以下のようなものである。

イスタンブール在住の異なった宗教(イスラーム)的態度をもつ人々に、それぞれ個別に、イスタンブール・ファティー地区チャルシャンバ界限で撮影記録された共通の景観映像を視聴してもらい、彼／彼女らが、そこに宗教文化に関わる表象を発見し、それを対象化し、印象を抱き、意味付けを行い、そして宗教的な価値にもとづく何らかの評価を下す「読み取り」を体験してもらう。くわえて、この過程と並行してインタビューを行い、その映像を視聴する過程で見出された宗教的表象、印象、評価を口頭で語ってもらい、その口述と視聴映像とを同期させながら映像収録することによって、人々がどのような宗教的表象を発見したのか、それらに対してどのような印象をもったのか、さらに、どのような価値的評価を与えたかを明らかにする。

これらの作業をととして、まず、地域景観の中に埋め込まれた「可視化されたシンボル」としての宗教的表象が見出されるだろう。その見出された表象は、人々の宗教的態度の差異によって、同じ映像から異なったものとなるかもしれない、あるいは逆に、その宗教的態度の差異を超えて共通したものとなるかもしれない。いずれにせよ、他文化に属する者には認知できない宗教的表象の存在を実証的に確認できるに違いない。そして、次

3 グローバルな市場経済の拡大に伴って、それと補完の関係にある多文化主義理念の浸透は、トランス・ナショナルなレベルでの文化変容をもたらしつつあり、そのような文化変容は、地域社会レベルにおいては、生活様式、衣装風俗、街頭景観などのミクロな局面に顕著に表出し、急速な展開を示しつつある。そのような変容に共通する特徴の一つは、シンボルや意匠などの表象文化の水準において変化が強く現れているということであり、言い換えれば、それは、宗教／エスニックな文化の可視性の拡大であると言える。

4 Istanbulの日本語表記について、現地での発音に近い表記を採用することとし、本論では以後イスタンブールと表記する。

5 Fatihは、日本語での表記としては、その原音に対応させて、ファティフあるいはファティーの2つの表記が可能であると思われるが、本論では後者の表記を採用することとした。

6 大阪・生野界限は、歴史的に、日本でも有数の、在日コリアンが集住してきた地域社会である。近年、日本におけるコリアン文化に対する関心の増大にともなって、この地域にはコリアタウンと呼ばれる商業地区の開発が住民と行政の協力によって行われ、同時に、コリアン文化を核にした観光地化が進められた結果、コリアン文化の可視化が急速に進展した地域である。

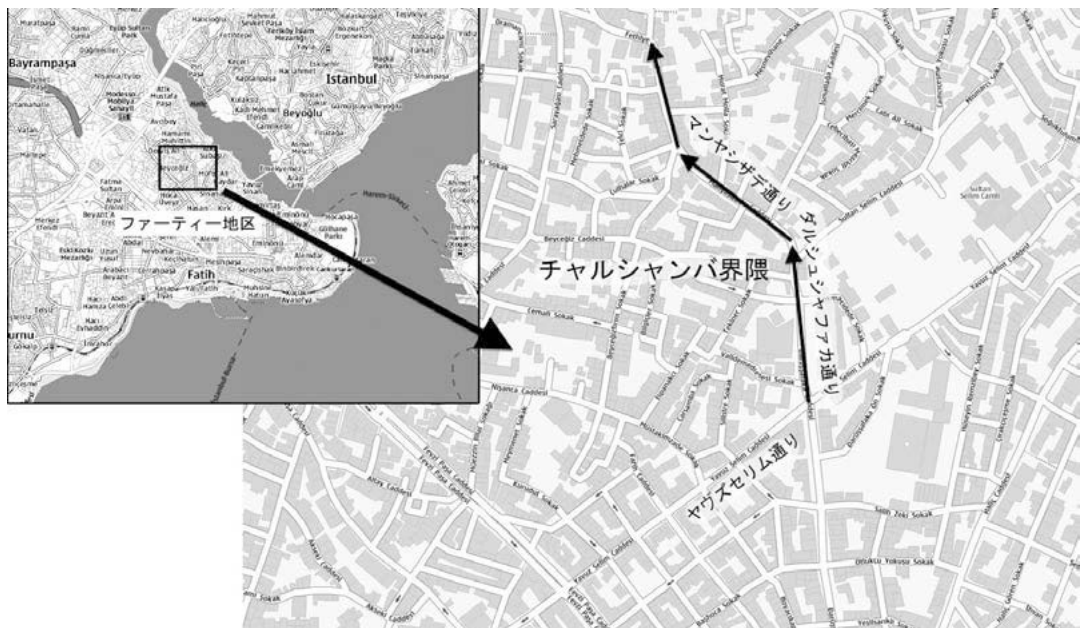
に、人々のそれぞれ別個の口述を、視聴映像を共通のプラットフォームとして統合的に整理することによって、異なった宗教(イスラーム)的態度をもつ人々がそれら地域の宗教的表象群に対して構築する印象や価値的評価を比較分析するものである。

## B. 調査の方法と対象者の特徴

### 1. 素材映像の概要

本調査でインタビュー対象者に視聴を求めた

映像素材は、2012年9月1日に実施されたフィールドワーク<sup>7</sup>によって、撮影されたファーティエ地区チャルシャンバ界隈の映像記録から、フェヴズィパシャ通り (Fevzi Paşa Cd) とダルシュシャファカ通り (Darüşşafaka Cd) とが交わる交差点からダルシュシャファカ通りの左側歩道を北上し、ファーティエ寺院へとつづく横丁の角までのビデオ映像とした。映像の再生所用時間は、10分11秒である。地図1は、本調査で使った映像に収録された街路を地図上に表示したものである。



地図1

このチャルシャンバ地区は、髭を蓄え、長いコートとゆったりとしたズボンに身をつけ、イスラーム風の帽子をかぶった男たちや、チャルシャフ<sup>8</sup> (Çarşaf) に身を包んだ女性たちを数多く見ることができる場所である。この地区に住む住民の多数は、政教分離と世俗主義に傾倒する比較的裕

福な都市中間層とは異なり、多くは地方出身者であり、社会経済的地位は相対的に低く、世俗主義ではなくイスラームを生活規範とする傾向を有してきた。今日、急速にイスラーム色を強めるトルコの政治状況の下で、これらの人々は、よりイスラームのライフスタイルや風俗を顕在化させようと

7 山中速人、井藤聖子「都市における宗教的表象と地域のアイデンティティ～イスタンブル(トルコ)における街頭映像の記録と分析～」『総合政策研究』43号、2013年

8 全身をゆったりとした黒色の布で覆う女性の服装

している。いわばイスタンブルにおいてもっともイスラーム的表象の表出が著しいと予想される地区である。

## 2. インタビュー対象者の選定とインタビュー実施過程

インタビューの対象者として、イスタンブル在住の5名のトルコ人住民を選んだ。もとより、本調査の関心の中心は、人々の表象理解の多様な様相を質的に記述することにあり、世論調査のような統計的な代表性を対象者の選定に課す必要はなかった。したがって、インタビュー対象者の選定に際しては、イスラームに対する意識や態度について、可能な限り多様性を示すことができるよう配慮された。対象者の具体的選出については、調査プロジェクトのカウンターパートであるイスタンブル大学文学部シェイマ研究室の協力で、スノーボール方式のサンプリングによって選び出された。

これらのインタビュー対象者の前で、素材映像をコンピュータから再生し、対象者に視聴してもらい、宗教上の興味を惹起した箇所や宗教上の表象として知覚した箇所が表示されると、自由に映像を停止してもらい、その静止映像についてのコメントや意味付けや評価を自由に話してもらった。さらに、これらインタビュー対象者が視聴（再生させたり、停止させたり、またそこでコメントを加えたり）しているコンピュータモニタの画面を対象者の肩越しにビデオ撮影し、彼ら／彼女らの声と同期させながら撮影録音していった。

インタビューは2013年2月にイスタンブル大学文学部シェイマ研究室のスタッフたちの協力<sup>9</sup>によって実施された。

## 3. インタビュー対象者の属性とイスラームに対する態度

今回の5名のインタビュー対象者の特徴を、とくにイスラームへの態度を軸として、つぎに述べておきたい。インタビューの冒頭に、対象者5名のそれぞれに、イスラームに対してどのような態度や考え方をもちか尋ねた。その回答にもとづいて、以下、対象者5人の属性とイスラームに対する態度をまとめておきたい。

### a. Aさん：女性53歳、主婦

彼女は、イスラームについて、つぎのように語った。

自分を熱心なムスリムだと思う。時々、ジャーミーに行き断食もするし、毎日5回お祈りもする。酒はのまない、タバコは止めた。彼女のお母さんは、映像を撮ったチャルシャンバ界限に住んでいて、チャルシャフを着ている。Aさん自身もスカーフを被っている。

最近のイスラーム文化は、とても素敵なことだと思う。若者たちが、自発的に学んで、ムスリムとしてしなければならないことをし始めている。なぜお祈りをするのか、若者たちが自分自身で求めて学び、祈るようになっている。

これから宗教(イスラーム)について、今までより長い時間、学校で授業が行われるようになるので、それをとおして自分の宗教を正しく理解し、ムスリムがしなければならないことを実践するようになれば、ムスリムとしてより充実した生活ができるようになると思う。今、テレビやラジオでイスラームの偉い人たちが話している。現代、テクノロジーのおかげで多くの人たちが彼らの話を聞く機会を持てるようになるのはよいことだと思う。

Aさんは、このチャルシャンバ界限について、ここには、ヤヴズ・スルタン・セリム(Yavuz

9 本報告の執筆者の1人である井藤が、インタビューの全過程に立ち会い、インタビューが所定の手続きにもとづき、意図通り行われているか確認をおこなった。また、ビデオ映像に記録されたインタビュー音源は、シェイマ研究室スタッフによって日本語訳された。日本語への変換作業の全体は、井藤によって監修され、必要に応じて編集が加えられた。

sultan Selim) モスクや、偉大なイスラームの聖者、ファーティー・スルタン・メフメット (Fatih sultan Mehmet) モスクなどがあるなど、イスラームが本当に濃く表れている所だと述べた。そして、そのために、イスラームの聖者もたくさんいるし、宗教的知識がとても豊富で尊敬にあたいするイスラームの僧侶たちもいる。そして、この地区では、コーランや宗教的な知識を学べる機会など、とても素敵なところがたくさんあるとも答えた。

**b. Bさん：女性、35歳、会社勤め(保険業務担当)**

彼女は、イスラームについて、つぎのように語った。

自分は、濃いムスリムだとは思わない。ジャーミー(モスク)には、時々、あるいは特別な日に行く。しかし、ジャーミーに行くことは、ムスリムにとって祈るための必要条件ではない。それに、ジャーミーでは、女性はいつも二番手扱いされている。

タバコは飲まないが、お酒は飲む。断食はするが、夏は難しいのではないこともある。それに、仕事と一緒に断食をするのは難しい。5回の礼拝については、毎日とはしていないが、できるだけするようにしている。しかし、欠かさず礼拝をしていないことについて、とくに言挙げするつもりはない。多くの人が、礼拝を毎回欠かさずしているわけではないと思う。

最近のイスラーム文化は、本来の物よりほど遠いものになっていると思う。アッラーは頭を使えとおっしゃっているが、最近のムスリムは、特定の誰かの言葉だけを聞いて自分で勉強したり調べたりしない。政府はイスラーム文化を上から押し付けるが、それでは本来のイスラームから離れてしまう。このよくない傾向はいつそう強くなっている。そのうち、イランよりもひどくなってしまうかもしれないことを憂慮している。

**c. Cさん：女性、27歳、会社勤め**

彼女は、イスラームについてつぎのように語っている。

自分は濃いムスリムではない。お酒もタバコも飲む。一日5回の礼拝は、したりしなかったりで、断食はしない。

最近のイスラーム文化は、政治的色彩が強まっているように思う。政府によって、タバコやお酒は禁止する方向に向かっており、いくつかの町ではカフェやレストランでも禁止されるようになった。これでは、市民的な自由が奪われてしまう。そういうことを政府がするから、飲酒をしない人たちは、飲んでいる人たちを嫌悪の目つきで見えるようになってきた。信仰行為というのは、一人ひとりの個人が信じる形で行うものであり、強請されるものではない。現政権のAKP(公正発展党)は、飲酒などを禁止することによって、自分たちのイデオロギーを国民に強要しようとしている。

**d. Dさん：男性、46歳、公務員**

彼は、イスラームについて、つぎのように語った。

自分は、人々の勝手な解釈によって歪められたイスラームを放棄し、本来のイスラームを原書から学び、人に教えながら暮らしている、意識ある1人のムスリムである。

酒は飲まないが、タバコは吸う。タバコを吸うことは、イスラームの教義として間違っていることを知っている。だけれど、それを間違いだと自覚することができれば、とりあえずは問題ない。断食は毎年している。一日5回の礼拝もしている。

イスラーム文化については、20年前に比べて、より多くの本が出版され、また翻訳も行われたことから、どのような意識をもつことが本来のムスリムとして正しいことが分かるようになってきた。たとえば、イスラーム以前のシャーマニズムなどからの影響が現在でも残っていることが分かった。そのような本来のイスラームではない悪

い伝統や間違った信仰は、ムスリムとして排すべきだと思う。アッラーだけが創造主であると思う。

**e. Eさん：男性、38歳、エンジニア(会社勤め)**

彼は、イスラームについて、次のように語っている。

いろいろな宗教についての本を読んでおり、自分には神がいることを信じているが、どちらかといえば無宗教であると思う。

宗教というのは、誰かに言われたからするのではなく、どう実践するかは、自分で勉強し自分で決めなければならないと思う。しかし、一般には、地獄で焼かれることや、アッラーから罰を受けることを怖れて、イスラームを選択しているように思う。とくに、今のトルコのイスラーム文化は、どう他の人に見られているかばかり気にするようになった。男性はジュッペ<sup>10</sup>(cüppe)、タッケ(takke)、サルク(sarık)、女性はトゥルバン(turban)、チャルシャフ、シャルヴァール<sup>11</sup>(şalvar)を着ていることが、イスラーム文化だと見なされている。

本来は、心の中にある問に答えを見出すことがイスラームの信仰なのに、今のトルコでは、それが宗教上の罪と見なされている。政府もそれを利用し、また、イスラームを商売に利用するものもある。この国では、本来のイスラーム文化がなくなってしまった。寛容というものもなくなり、みんな口先で唱えているだけになってしまった。

**C. インタビュー記録～映像から読み出された  
表象群とその意味づけ**

**1. 対象者による「読み取りテキスト」群の整理の方法**

5名のインタビュー記録はトルコ語の音源から直接日本語訳された。つぎに、日本語として文字化されたテキストは、個々の対象者のコメントごとに切片化された。これを仮に「読み取りテキスト」とここでは呼ぶことにする。つぎに、そのコメントが参照する表象の静止画を元の動画映像から切り出した。ここでは、この静止画を仮に「参照画像」と呼ぶことにする。つぎに、「読み取りテキスト」と「参照画像」のマッチングを行った。異なった対象者が共通の参照画像についてコメントを付けている場合もあるから、「参照画像」と「読み取りテキスト」の関係は、1対1とは限らない。1つの「参照画像」と複数の「読み取りテキスト」が対応していることもあるし、「読み取りテキスト」が明確な「参照画像」を持たない場合もあった。

さらに、これらの「読み取りテキスト」群を、対象者ごとではなく、読み取りの素材となった街頭映像の流れ<sup>12</sup>にそって整理を行った。「読み取りテキスト」には、この流れにそって順番に通し番号を振った。また、「参照画像」についても、同様にこの流れにそって通し番号を振った。

88の「読み取りテキスト」と53の「参照画像」が上記の手続きによって得られた。

10 ジュッペ(cüppe)長袖で丈の長い薄手のコート

11 モンベのようなズボン

12 フェヴズイバシャ通り(Fevzi Paşa Cd)とダルシュシャファカ通り(Darüşşafaka Cd)とが交わる交差点から始まり、ダルシュシャファカ通りの左側歩道を北上し、ファーティエ寺院へとつづく横丁の角に至るまでの行程

2. 「読み取りテキスト」<sup>13</sup>の内容と「参照画像」<sup>14</sup>

写真1

【01】Bさん ここにバシュオルトウスの女性がいます。トルコでは、この被り物(バシュオルトウス)はイスラームの象徴です。しかし、詳細に調べると、これについて色々な解釈がされています。しかし、このおばさんの横にいるのは多分彼女自身の娘たちでしょう。自分は被っているが、

娘たちには自由にさせています。

【02】Cさん スカーフをかぶっている女性と、その横に半袖を来た普通の格好をした女性が並んで歩いています。これは、イスラームが寛容な宗教であるということを示していると思います。



写真2

13 [n] (n: 通し番号) として表示

14 pn (n: 通し番号) として表示。なお、掲載した写真に関しては、プライバシーを保護する目的から、個人を特定できるような視覚的特徴に對してぼかし処理を施した。

【03】Bさん このおじいさんの被っているのがタッケです。一般的に男の人がモスクにお祈りに行くときに、手編みのタッケをかぶります。また、子供の誕生や死者のための宗教儀式の際にもかぶります。

【04】Cさん ここにタッケをかぶっているおじさんがいます。一般的に年を取った男性はこれをかぶり、宗教心とはあまり関係がありません。帽子としてかぶっています。この男性は宗教深い人かも知れませんが、年を取ると頭を守るためにかぶることも多いのです。

【05】Cさん (男性の後ろから歩いてくる2人の女性を指して)この女性たちは、スカーフで頭をおおっているのかどうか分かりません。イスラームでは、髪の毛を見せてはいけないと言われてます。そして、服も体の線が見えないようにしなければならないと言われてます。でも、この二人の女性は、スカーフをかぶっているにもかかわらず、宗教的に関係のない体の線が見える服装をしています。多分彼女たちは、家族や夫から強要されてスカーフをしているのだと思います。または、住んでいる地域のせいかもしれません。このようにスカーフをしています、本心は被りたくないのだと思います。



写真3

【06】Bさん ここでは、違った形の被り物が見られます。ただ、前で結んでいるだけの状態です。私の家族で父方の祖父母や、母方の祖母はハッジに行った人たちです。トゥルバンはありません。みんなスカーフを前で結んでいます。髪をみせないために。なぜかという、女性の髪が宗教上の罪だからです。しかし、イスラームでないことをイスラームの名の下に言ったり、自分の利益にな

るから、自分のいうとおりにすることがイスラームの道だと言ったりすることがあるのです。コーランを読まずに、私が指し示した道を通りなさいということは、偽りを広めることだと思います。彼女たちはスカーフをかぶっていますが、スリッパをはいて腕もみえています。イスラーム式のやり方だとは思えません。





写真4

【07】Bさん ここに映っている広告に目が行きました。ここにイラーヒ・アルバム (İlahi albüm : 神を讃える歌のアルバム) が出たとか書かれています。バクフ銀行の宣伝の看板なのですが。イラ

ヒーはイスラームでは集会の際に歌われる音楽を言います。弔辞や誰かの思い出を語るときなどに歌われます。お母さんの追悼歌や天国の追悼歌などがあります。詩に音律がついたものです。



写真5

【08】Bさん ここに映っている人は、髭をはやしています。これは普通の髭だとは思いません。特定のタリカットや特定の信仰団体固有の形の髭だと思います。タリカットには、普通ホジャと呼ばれる人がいて、その人が作った規則があり、自分たちのタリカットにはこれこれの格好をしなけれ

ばいけないなどと言います。髪は一般的に長くはありませんが、イスラームの預言者にはこのような髭があります。髭はスンネット<sup>15</sup> (sünnet) の一つです。スンネットとは、「預言者が行ったよい言動をすること」という意味です。預言者が髭を生やしていたので、髭を生やすことはよいことだ

15 スンネット (sünnet) 預言者マホメットの行った行為や語ったことを実践すること。イスラームにおける善行。

というわけです。しかし、髭は、他方、その土地の風習や習慣であるとも考えなければならないと思います。だから、髭があるのがイスラーム式でよいとか、素晴らしいことだとはならないはずで  
す。しかし、この人は、髭があるのはよいことだ

と思い込んでいるのです。マイケル・ジャクソンの着ている服は格好いいから同じ服装を着たくなるのと同じです。予言者がヒゲをはやしているから、自分たちもそれを真似ると、よいことをしていると思ってしまうのです。



写真6

【09】Cさん この女性の服装が注意を引きました。これは、トゥルバンやチャルシャフではありません。イスラーム「かぶる」ということについての私の理解に、この女性の服装は当てはまりません。宗教的なイデオロギーの表現としてではなく、髪が見えないようにスカーフをかぶり、体の

線が見えないような大きめのものを着るのです。

【10】Bさん このおばさんも、またスカーフをかぶっています。普通にかぶっています。私の母もこのようにかぶっています。ただ髪の毛を見せないように。これは、強制されてというようなことではありません。



写真7

【11】Dさん ここで注意を引かれるものは宗教的なモチーフで飾られたスカーフを被っている女性がたくさんいて、格好として髭、シャルヴァール、タッケ、ジュッペ、スカーフなどの使用が見られます。ただ、ここはイスタンブルです。イス

タンプルはモダンな街です。そしてコスモポリタンな町です。生活様式は多様です。だから、このように、同時にモダンな格好をした人たちが歩いているのも見受けられます。イスタンブルでは、人々が融合していることがわかります。



写真8

【12】Bさん ここに映っているおじさんも、また特定のタリカットのメンバーです。なぜならシャルヴァールを着て、頭にはタッケをかぶっていて、特定の形に整えられた髭をはやしています。手にはテスピヒ (tespih: 数珠) を持っています。テスピヒや髭は、一般的に年取ったおじさんたちのものです。老人の手には時間をつぶすため

にテスピヒがよくあります。しかし、年寄りでも普通シャルヴァールは履きません。ただ、地域的に風習としてシャルヴァールを履くところもあります。地方で、女性たちが畑に行く時にはシャルヴァールを履いているのをみたことがあります。でも、今、見ているのは、特定のタリカットのものだと思われるシャルヴァールです。



写真9

【13】Bさん ここでは、イスラームの他の形をみることができます。この女性は、前の女性とは違い、トゥルバンを着用しています。髪の毛は全くみえず、パルドゥス<sup>16</sup>(pardösü)を着ています。パルドゥスは、女性の身体の線を見せないために着ます。身体の線が見えると男性の気をひきます。だから気を引かないように気をつけないといけません。キリスト教のギリシャ正教会の人たちのように、イスラームでも、より厳格な人たちは黒いチャルシャフを着ます。でも、ここではおばさんとおじさんは手をつないでいます。一般的に、イスラームに厳格な人たちは、道を歩くときには手をつなぎません。男性は前を、女性は後ろからついていくべきだと考えるからです。私は正しくない考え方だと思いますが。それは、女性が二級市民であることを意味しています。男性は頭脳を使い女性に指図しますが、女性は考えるこ

とをせずただ家にいて子供を生むだけでいいと考える人達です。しかし、この手をつないでいるのは、彼らが、そういう考え方ではないことを意味しています。その背後から来ているおじさんは、頭にタッケをかぶっています。普通イスラームでは、タッケは、私の家族ではモスクに行くときや祈るときにかぶります。外に出るときには、頭を保護するために帽子をかぶるか、あるいは、無帽です。この男性は、シャルヴァールを着ています。上半身には、グレーのパルドゥスを着ています。グレーのパルドゥスを着る理由は、所属しているタリカットの色だからでしょう。着ている服の色によってタリカットが分かります。服の色、長さ、形などタリカットで異なります。たとえば、「うちのタリカットではスカートはだめだが、パンタロンはOK」などとタリカットによってさまざまです。

16 パルドゥス(pardösü) 軽いコート



写真10

【14】Eさん この男性はタリカット(tarikit：宗派、教団)の一員です。ヒゲを伸ばしサルック<sup>17</sup>(Sarık)と呼ばれるターバンを特別な巻き方で巻きます。巻き方でそれぞれのタリカットを示します。その姿で、イスラームの一派といわれるのですが、コーランに書かれている本来のイスラームとは関係がありません。コーランに書かれている本来の生活様式(スタイル)とは無関係なのです。

【15】Cさん ここでは、ジュッペをきたおじさんがいます。サルックやジュッペは、シェリят(şeriat：イスラーム法典)に由来する男性用の服装です。私は、これらが現代的だとは思えません。私には、なぜこの男性がこんな姿をしているか分かりません。

【16】Aさん イスラームでサカル(sakal：あご髭、ほお髭)をはやすのは、スンネットです。サルックをかぶるのも同じです。みんながするかと言えば、そうではないかもしれませんが、スンネットを実行するのはいいことです。スンネットとは、イスラームの預言者であるマホメットのしたこと、そして言ったことをすることです。預言者様の命令です。

【17】Dさん ムスリムの典型として世界中に知られているような格好をしている、このお年寄りには、このチャルシャンバ地区の住人だと思えます。彼に似て、同じ格好をして同じ考えをする多くの人がこの地区に住むようになりました。彼らは自分たちの世界を作っています。自分の生活の場は他人に干渉されたくないと思っているし、他人を干渉することもしません。

17 布で出来た円柱形の被り物



写真11

【18】Bさん 3人のおばさんが映っています。後のおばさんは長いバルドゥスを着ています。ただし、現代風のもので。だから、そんなに長くありません。また、スカーフもかぶっています。前

の2人は、もっと長いバルドゥスを着ています。はっきりと分かるように。家族がこのような格好をするのが正しいと思っているので、このような格好をしているのかもしれませんが。



写真12

【19】Bさん 例えば、ここでは、別の形の被り物を見ることができます。髪を見せないように、ボネをかぶっています。ボネは髪の毛をきつく巻いて表に出ないようにし、その上にスカーフを被ります。でも、この女性はサングラスをかけていますね。普通、イスラームでは人はできるだけ質素に、飾り気のないようにしなければなりません。

私の考えではそうです。でも、彼女のサングラスは人の注意をひきます。でも、サングラスがモダンだから掛けているのでしょう。彼女は、チャルシャフを着ないで、パンタロンと長い上着を着ています。また、子供を抱えています。トルコの女性に対する誤解があります。チャルシャフを着て、スカーフをかぶり、賢くなくて、従属的と

というような誤解です。でも、映像には、スカーフをかぶっていない女性が映っています。彼女ももちろんムスリムですし、トゥルバンでサングラスを掛けた先ほどの女性も、ムスリムです。大切なのは、その人がどう感じるか、どう考えるかです。イスラームでは、アッラーと人の間に誰も割り込むことができないとされています。例えば、

キリスト教では、牧師のもとに行って、犯した罪について話すことができますが、イスラームではアッラーと人の間には誰も介在できないのです。飾ることから遠ざからなければなりません。私はスカーフをかぶっているの、それを見せたいという自分の欲求から遠ざからなければなりません。できるだけ簡素にしなければならないのです。



写真13

**[20]**Cさん (お墓の映像の前で、道端の広告の大きな看板の前で本を売っているのを見ているチャルシャフの人物を指して)ここに黒いチャルシャフを来た女性がいます。私は、このチャルシャフにも賛同できません。女性がここまで覆い隠してしまうのは、他の人目や男性の注意を逆に引くようなものだと私には思えます。覆われている下は、どうなっているのだろうと、興味をそそるからです。  
**[21]**Bさん 属しているタリカットや団体によって服装がちがいます。チャルシャフを着た人がいます。黒のチャルシャフ。多分属しているタリカットの指示か、家族の誰かの指示で着ているのかもしれませんが。外は暑いから、黒色の服を着るのは健康的によいことではありません。この女性の身体には日光が当たりません。髪の毛も同様です。スカートの丈も長いです。健康的ではありません。

せん。しかし、髪を見せると宗教上の罪になり、イスラーム的でなくなるといわれているのだと思います。多分この人の家族やお父さんやお兄さんが彼女を強制的にこういう格好にさせているのでしょう。彼女もそういう考えに染まってしまったのです。一番の問題は、女性たちの無知です。権利を主張しないこと、そして教育を受けていないということです。コーランを読まないで、他人から聞いた知識を信じているのです。しかし、コーランでは、全てははっきりと規則で示されています。もっと詳しく知りたいときには、学者の書いた本を読めばいいのです。

**[22]**Aさん チャルシャフを着た女性が映っています。私たちの宗教であるイスラームにおいては、頭に被りものをする女性は、このようにチャルシャフ、つまりコーランで着用が求められてい

るジルバブ<sup>18</sup>(cilbab)といわれている形でかぶらなければいけません。しかし、全てのムスリムはこのようにしていません。自由にしています。したい人はし、したくない人はしていません。しかし、頭に被り物をするのは、アッラーのための、私たちにとってしなければならない命令です。本来ムスリムは、頭に被り物なしで外を歩いてはいけないのです。しかし、イスラームの国でありながら、いろいろな条件があって実行できていません。

【23】Dさん このチャルシャフを着た女性は、この地区を象徴する女性たちです。多くがこのような格好の服装をしています。信仰からこのような服装をしているのです。しかし、先祖から受け継いだり伝統に基づいたりしたというより、年長者や宗教家たちの言うとおりに従っているだけのようには思います。イスタンブルの他の地区では、このような格好をしている女性はあまり見られないと思います。



写真14

【24】Bさん この後ろにはお墓があります。多分横にはモスクがあるでしょう。トルコでは一般的なお墓です。サウジアラビアに行くとこのような墓石はありません。埋葬した上に砂をかぶせます。墓石はありません。トルコで、オスマン帝国時代で、墓石には亡くなった人の名前が書かれます。職業、または詩や二行連句などが書かれます。

【25】Aさん ここは、偉人たち、イスラームの聖者たちの眠っているお墓です。

【26】Eさん イスラーム文化、特にトルコ文化に関係する特別な物がここにあります。このお墓はトルコのオスマン帝国時代のもので、全てのイ

スラームの国がこの様式だとは限りません。お墓は一般的には道端にあります。人々の暮らしに寄り添っています。だから道のすぐ傍にあるのです。毎日通る度に目に入り、死を思い起こさせます。墓を見て、人生とはなにかを考えることは必要で、正しいことだと思います。死者に敬意を払うために、地面と同じ高さではなく、上にあります。人々は墓の横を通る時、祈り、今生きていることに感謝します。亡くなった方たちを思い出したり、生きていることの価値を実感したりするでしょう。ただ、現在では、このような形の墓はありません。ここは古い地区なのでこのような古い様式の墓が残っているのでしょう。

18 ジルバブ(cilbab)とは、シャツ、チャルシャフ、フェラジェの意味。フェラジェとは、女性の外出着で、マントに似た後ろにゆとりがあり、襟のない、多くの場合がスカートのように長い上着。





写真15

【27】Bさん 丈の長い服です。一般的にここチャルシャンバ界隈のあるファーター地区はコスモポリタンな地域です。色んなタイプの人に住んでいます。だから、チャルシャフや長いパルドゥスなどを着ている人をあまり見ません。しかし、このチャルシャンバ界隈に来ると、チャルシャフを着た多くの人に出会います。丈の長い服もみか

けます。逆に、半袖のTシャツ姿はあまり見ません。(店の看板を指さして)ドゥア・ギイム(dua giyim: 祈りの服)と書かれています。これも、イスラームの1つのシンボルです。ここには、もう1つ注目すべきものがあります。ここでは女性より、男性は自由にすきな格好をしているようです。



写真16

【28】Bさん タイプの違う2人が映っています。1人はチャルシャフを着ていますが、色は黒ではありません。褐色です。彼女の属しているタリカットの色が、この色なのです。別のタイプの人

映っています。多分彼女たちのおばあさんでしょう。もう1人の女性は、その娘かお嫁さんでしょう。彼女は、チャルシャフを着てトゥルバンを巻いています。子供の頭にはボネでまとめてスカー

フが巻かれています。自分たちの信仰を子供にもさせています。「このような服を着るのよ、このように振る舞うのよ」などと言って、彼女は子供に強要しているのではないのでしょうか。でも、本来のイスラームなら、そうではないはずです。成長期で、何が正しくて正しくないのかを判断できない時に強要するのは間違いです。この女の子は、小さくてそれができない時期です。自由に太陽の下で、走り回ったり、スカートの裾をひるがえして走ったりする時期です。どうして太陽の光を避けねばならないのでしょうか。日光を浴びることは、ビタミンDを作る健康的なことなのに。サウジアラビアでも被っていますが、そこでは、太陽の光が強すぎるので、着るのだと思います。こんなに小さいときから着せるのは、正しくありません。子供は将来、同じようにするでしょう。正しいのか正しくないのか自分で考えず、教

えられた固定観念に従い続けるのです。

【29】Aさん スカーフをかぶっている女性がいます。イスラームでは、頭に被りものをしなければならぬことです。全てのムスリムは、ある歳になると被らなければなりません。しかし、ある条件のもとでは、被る人も被らない人もいます。みんな縛られているわけではありません。アッラーは、個人の自由な意志に預けました。だから、したいようにしています。

【30】Cさん 子供たちも頭にかぶっています。イスラームでは、子供たちに思春期になるまで頭にかぶることを勧めません。自分で判断できるようになってから、髪を見せないようにスカーフをかぶることを勧めます。でも、ここでは家族からの強要があります。成長しても、他の考え方や選択肢がありません。



写真17

【31】Eさん コーランでは、「頭に被れ」とか「被るな」とか書かれていないのに、それについて、何としても解釈をつけようとします。「こういう意味だ」とか「ああいう意味だ」とかいろいろな解説がなされています。しかし、明確なことは何もありません。明確に定義されていないことを、自

分の好きなように、必要以上に解釈しています。例えば、この被り物の結び方は、どのタリカットに属しているかを表しています。この人と、その右の人の結び方は違いますよね。最初の人は、首下から後ろに回して結んでいます。右側の人は、横で結んでいます。これらは、本当にイスラーム

と結びついているのか、私はないと思います。トルコでは、今から20年から30年前にこういう風俗が増え始めました。以前は、こういうタリカットを示す被りものはこれほど姿を表していませんでした。彼らの信仰は、本来のイスラームではなく、自分たちで作った信仰なので、大勢に受け入れられるものではありません。人には、それぞれに信仰や解釈の仕方があります。コーランそのものと比較すると、それぞれ大きな違いがあります。

【32】Dさん この地区では、外出している女性を多く見ません。家に閉じこもっています。配偶者の命令や考えにしたがって、男性から遠ざかることを求められます。これは宗教的な解釈からきています。しかし、彼女たちは伝統に従っているだけで、なぜそうするのか理由を知らないと思います。ただ、興味深いのは、この地区はイスタンブルの他地区より犯罪率が低いことです。



写真18

【33】Bさん この女性もチャルシャフを着ていますが、着方は少し違ってしています。彼女の口は見えません。鼻がみえているだけです。彼女たちの信仰では、できるだけ顔をみせないようにします。腕は中に入っています。しかし手には携帯電話を持っています。一般的に、彼らは預言者が着ていたように着なければならいと言われていいます。そうなら、携帯電話は使うべきではありません。私たちの宗教では、次のようなよい点があります。強要されないこと、簡略化できることです。本来は、地域や条件によって変えなければならいと言われていいます。ということは、この人たちのような服装は、アラビアならいいでしょう

が、その習慣や風習は他の地域では適さないはずです。例えば、南極や北極では、チャルシャフは薄い布なので、凍えて生活できません。そう考えるべきです。たとえば、昔は、手編みのチャルック<sup>19</sup>(çarık: 生皮を縫い合わせた浅い靴)を履いていました。今もそれを履かなければならないのでしょうか。人に学ばせずに、タリカットの考えを押し付けてそうさせています。女性は家に閉じ込められ、買い物と宗教的な集まりに行くだけです。「髪を見せるな、男性と話さな、宗教的な罪になるぞ」などということになります。しかし、考えてみれば、お父さんも男兄弟も男性ではないですか。おかしいことです。女性が無知であれば

19 チャルック(çarık)生皮を縫い合わせた浅い靴

子どもたちもそうなります。そうなれば、いつまでも男性優位になってしまいます。



写真19

【34】Bさん シャツをきていてスカーフを巻いたおばさんがいます。でも頭は、一部見えています。これは伝統的な着方だと思います。でも、頭の全てを覆うことについては、「一本でも髪の毛が見えたら地獄で焼かれてしまう」と、人々を怖がらせる言われ方もあります。しかしながら、コーランの原典ではそんなことはありません。コーランに書かれていることばを詳しく調べても、他の解釈もあります。この「覆う」という行為についての指示は、アッラーから予言者ムハンマドを通して、一つの出来事の形をとって、伝えられています。あるとき、預言者様の妻のラクダがいなくなったので、妻は預言者の弟子と2人で別のラクダに乗って探しに行きます。そのことがうわさになり、それを聞いた預言者はヤキモチをやきます。すると、アッラーからの言葉が降りてきます。この言葉の中に、ズィーネット (ziynet: 飾り) を覆いなさいという指示がありました。このズィーネットはいろいろな意味に解釈されます。ある人にとっては頭を覆うことになり、ある人にとっては首やその下、または胸を覆うということと解釈されるのです。身につけている金もズィーネットと解釈できます。なぜ装身具として

の金を隠すのかといえば、他人の目から目立たなくして、女性を守るからです。他方、今着ている服も、覆うものと解釈することもできます。人々は、このようにズィーネットをそれぞれ自由に解釈します。だから、一つの言葉には20や30の意味解釈が生まれます。イスラームが入ってくる前のサウジアラビアでは、女の子が生まれたらすぐに埋められたといわれます。女の子は、二級市民や三級の市民ではなく動物以下の扱いをうけていたそうです。アッラーが人間を罰するために、女の子を授けたと思われていました。それで女の子は生きるべきではないという考えで、埋められていたのです。それに対して、預言者は、男女平等を最初に唱えました。男性も女性もアッラーが創造したものです。本当は女性の方が上なのです。子供を生むことができるからです。しかし、無知な社会は、女性を下にみてしまうのです。トルコでは、この10年間で、働く女性の解雇が目立ってきています。今では「家で子供の世話をしろ、社交生活もなくていい、誰とも会わない、でも男の俺は好きにする」という、男性の勝手な社会になろうとしています。



写真20

【35】Cさん スカーフを被っているのに短い袖の服を着て、その下に、長袖の服を着ている女性があります。本当は、短い袖で体にピッタリしたものを着たいのに、他の部分が見えないように、中に長袖の服を着ているのです。彼女が本当に着たいのは、このピンクの服です。でも体の他の部分が見えないようにと下に着ています。でも、本当は、彼女がどうしたいのかは、はっきり分かります。

【36】Bさん 家族が宗教上スカーフをかぶらなければならないとこの女性たちに言っているのでしょうか。しかし、スカーフ以外は、ご覧のとおり好きなようにしています。ジーンズを履いて、上には、ぴったりしたシャツ。スカーフをかぶって

いなければ、この女性はこんなに注意を引かれなかったでしょう。彼女を見る人は、どのように思うのでしょうか。第三者の目で見れば、スカーフをかぶっているのに、胸や腰がはっきりしている。普通の人より、もっとめだって、注意を引いています。これは正しくないと思います。強制されるとこのようになってしまいます。

【37】Dさん この地区に暮らす人たちの人間関係は親密で、善意に基づいて、互いに親しい間柄にあります。誰もが親戚のように接します。この通りでは、誰も犯罪被害を受けることはありません。この地区を夜一人で歩いても安心です。



写真21

【38】Bさん スカーフをかぶっているおばさんがいます。母もこれと同じようにしています。上にフルカ(hırka: 綿入れ・カーディガン)を着ることもあるし、着ないこともあります。外出時の習慣になっています。父が、そのようにするべきだと言ったのでしょうか。例えば、祖母たちも外出するとき、畑に行く時や水をくみに行った時に上に

こぼれないように、上下が別れたフルカで覆っていました。それは、黒いシャルヴァール、チャルシャフとは違いました。そして、男女並んで歩かないとか、これを着なければならないというようなことはありませんでした。私たちの食卓では男女一緒にいただきます。男女がお互いに避けあうということはありません。



写真22

【39】Bさん ここに映っている服は全部丈が長いです。全くジーンズやズボンは見当たりません。女性がズボンを履くのは宗教上の罪だと思われるからです。理由は男性のように見られるべきではないからです。男性は男性として、女性は女性として見られるべきです。でも、ズボンを履くことで、女性が男性とみられるわけではありません。スカートを履くと風でめくれますが、ズボン

はそんなことはありません。私たちの昔の伝統では、シャルヴァール(もんぺのようなもの)を履いていました。クナゲジェシイ(Kına gecesi: 結婚式の前に、女性の家で花嫁の指や手のひらにヘナを塗るときにする催し)の際でも、ズボンは着られません。服装を誰かに強要することは正しくありません。しかし、それを正すのは並大抵のことではありません。時間が経つほどに難しくなります。



写真23

【40】Bさん ここに、ヨレセル・ヘラル・エト・ウルンレリ (yöresel helal et ürünleri: 戒律で認められた地場産の肉製品) と書かれた看板があります。10年ぐらい前から現れるようになりました。ヘラル (Helal) は、キリスト教にもユダヤ教にもありますが、「戒律上可能な」という意味です。逆に、宗教上だめな食べ物はハラム (haram) です。宗教上許された食べ物、例えば普通の肉は食べられますが、死骸の肉は食べられません。私たちの信仰では。また、豚肉もだめです。でもこれは、その人たちの生活で使われるものです。ヘラル・セルティフィカス (Helal sertifikası) は、宗教上ダメなものが入っていないという意味です。しか

し、こういう表示は正しいとは思えません。ここで買った肉は食べられるが、近所の人からもらった肉は食べられないことになりますから。食べ物についての禁忌は信仰によるものとしても、理由があります。例えば、豚肉については、寄生虫がいるのでよくないと言われています。

【41】Dさん トルコ人がドイツに移民して、彼らの食べ物が現地の食べ物と違うために、自分たちの食材を工場で作るようになったのと同じように、ここでも肉製品や乳製品や他の製品で戒律上可能な食べ物、合法的な食物 (helal gıda) であることを強調し、そんな製品を販売しています。



写真24

【42】Aさん ハジ<sup>20</sup>(haci)用に使うものを売っている店があります。ハジに行くときに着る物や使う物が売られています。メッカやメジナに行くことは、聖なることです。

【43】Bさん メkke・メディネバザールがあります。一般的に、メッカに巡礼に行ってからこのチャルシャンバ界限で買い物をします。15年、20年まえにはハジに行った人は、向から持って帰ってきました。巡礼に行った人はそこで折り、小さなお土産を買います。礼拝するときの小さな敷物(ceccade)、数珠(tespih)、女性にはスカーフ、男性にはタッケなどのお土産を買ってきました。しかし、今では向こうで買う代わりに、イスタンブルに戻ってからこのような店で買って配ります。メkke・メディネバザールでは、帰ってきた人が買ったり、行く人が必要な服や物を買ったりすることができます。例えば、(吊り下がった白い服)これはハジに行く人が着る服です。トルコでは、男性は、このようにクリーム色の上着を着て、下にはズボンをはきます。女性は白いバシュオルトゥスにクリーム色のワンピースを着ます。

その人がそうしたければ。帰ってくるときにも着ることができます。

【44】Eさん ここに、メkke・メディーネ・ハジ・パザル・マーゼメスイ(mekke medine haci pazari malzemesi:メッカ・メディナ巡礼関連用品)などと表示されています。ムスリムには、決められたやり方がなければならないと思っている人たちがいて、そういうモノを売ってお金を稼いでいる人たちがいます。ここは商店なので、もちろん物が売り買いされます。でも、どういう人たちに売られているかは明白です。このような店は、たくさんあります。例えば、このようにチャルシャフが、売られています。「ムスリムはチャルシャフを着なければならない」と誰かがモスクで言えば、すぐに売られているところで買わなければなりません。このように自分たちだけの商売が始まります。彼らは、宗教だけでなく、全てのことに自分たちの中だけで生活し、そこから外には殆どでません。この店に、もしあなたが一人で入ったら、店主は「何しに来たんだ」とにらみつけるでしょう。



写真25

【45】Cさん ここは、服を売っているお店です。チャルシャンバ界限では、一般的な服として、こ

のようなジュッペやチャルシャフなどが売られているようです。

20 ハジ(haci)「メッカに巡礼した人」が本来の意味。それが転じて「巡礼すること」を指す場合もある。





写真26

【46】Bさん ここに、「ペチェ(Pece: 黒いベール)のないチャルシャフがあります」と書かれています。黒いチャルシャフには、一般的に、ペチェをつけます。見たことがあると思いますが、サウジアラビアの女性はペチェをかぶり、顔をかくし開けません。外出するときに使います。食事をするときにも、ペチェの下から開けないように食べなければなりません。人道的によいことではないと思いますが、このような服装で、外を歩き、礼拝をします。イスラームでは、1日に5回礼拝をしますが、礼拝の前には、身体を水で清めなければなりません。清める時の作法があります。モスクに

行ったときに、この服装で、例えば足を洗うのはとても大変なことです。

ここには、テセットウル(tesettür)とあります。テセットウル(tesettür)とは、頭をこのように覆い、パルドスを着る(覆う)という意味です。それを店の名前にしています。この地区の店のほとんどの名前は、宗教的なものや宗教に関係した名前です。女性用に売られている服も、どれも丈が長いです。短い服は見当たりません。しかし、男性は映っているように半袖を着ています。特定の宗派は別として、男性は自由に好きな格好をしています。



写真27

【47】Bさん パルドゥス(pardösü：軽いコート)を着た女性がいます。このおばさんは、白いバシュオルトゥスをしています。最近、バシュオルトゥスやパルドゥスがとても贅沢(ゴージャス)な所から買われています。でも、この地区ではまだ売っていません。その向こうにもおばさんがいます。スカートをはいてシャツを来ていますが、ス

カーフをかぶっています。でも、すべてムスリムです。スカーフをかぶっていない人もムスリムです。イスラームでは、人間を分けへだてすることはありません。学問や知識を使わなければならないと教えられている宗教なのです。でも、それが後回しにされています。



写真28

【48】Dさん ここで売られている衣類は、たいがいこの地区に住む人たちの希望に添ったものです。違ったものをここで見つけるのは難しい。こ

れもこの地区の独特の生活様式(ライフスタイル)を示すものです。



写真29

【49】Bさん 髭をはやし、タツケをかぶりシャルヴァールを履いたおじさんがいます。特定のタリカットに所属しています。クヴェット・トゥルク (Kuvvet türk) は、イスラーム資本で作られた銀行です。ファイズ (Faiz : 利子) はハラム (haram: 宗教上の禁制) だと言われている、キャル・パユ (kar payı : 利益の分け前) という別の言葉をつかっていますが、それも実際には利子です。イスラームでは、利子、つまり与えた以上のお金を受け取るのは宗教上の禁制です。借りたお金があれば当然返さなければなりません、実際に貸したお金以上に返してもらうべきではありません。しかし彼らは、利子が宗教上の禁制だと言いながら銀行を作り、人々からお金を集め、利子を取って

います。言葉を換えていますが、していることは利子をとることです。

ここに、向こうに歩いていた2人の人が映っていました。一人はスカーフをかぶっていて、もう一人はかぶっていません。トルコでは、本来、このように考え方が違う人が一緒に行動できます。ところが、考え方の違う人がお互いを容認する国であるにもかかわらず、チャルシャンバのある地区でスカート履いて歩いていると問題になります。でも、逆に、ニシャンタシュ (イスタンブール的高级店が並ぶ繁華街) にチャルシャフを着て歩くと、これも問題になるかもしれません。最近、トルコではお互いに寛容であることが失われようとしています。



写真30

【50】Bさん ジーンズを履いて、しかしスカーフをかぶった女性がいます。信仰上スカーフをかぶりながら、ジーンズを履いています。信仰上、何も差し支えないはずなのに、ズボン履くことを宗教上の罪だとみなし、殴る男性もいます。子供を殴る人もいます。

(反対側を指して)ここに、モスクがあります。モスクから出てきている人もいます。モスクはイスラームのシンボルです。人々はイバーレット

(ibaret : 礼拝、信仰)といいます。しかし間違っていることがあります。モスクというのは人々が集まり、悩みを相談し、解決しなければならない問題を解決し、正しい知識を与えてくれるイマムの指導により人々を意識的にさせる場所であるはずなのに、今現在はそうではありません。人々はお祈りをしていますが、正しく礼拝をしているのか、お互いについて何を考えているのか、その地区で何が起きているのか、人々が求めている

ものは何かなどという解決すべき問題が片付いていません。モスクの中はとても汚いです。絨毯は掃除せず不潔です。礼拝の前に清めていますが、例えばエユップ<sup>21</sup>に行くと手を洗っている洗面台に足を洗っている女性や男性が見られます。これは普通、イスラームではあってはいけないことで

す。彼らに聞くと「私は礼拝前の清めをしているのです」と言うでしょう。清めなければなりませんが、正しくしていません。スカーフをかぶらなければならない、チャルシャフを着なければならないという、全く話にならない強迫観念で人々を圧迫しています。



写真31

【51】Bさん スカーフをかぶって、赤いパルドゥスを着ています。赤のような鮮やかな色も又宗教上の罪であると言われています。人の目を引くの

で、男性の一部の人や、こういう考えをする人は「着るな」と言うでしょう。



写真32

21 エユップ(Eyüp) イスタンブルのヨーロッパ側の地名

【52】Bさん 色々なタイプの男性が映っています。ズボンを履いてシャツを着ている人。半袖のシャツを着ている人。しかし、別の人はタツケをかぶっています。長いパルドウスを着て、シャルヴァールをはいています。預言者がこのように着たので、私たちもそうしなければならないという考えでしょうが、そんなことはありません。もちろん正しいこともあります。例えば、外にでるときには、日光から守るために頭に帽子をかぶりなさいと。しかし、身体全部を覆ってしまうと、日

光をあびることができません。頭を使いその地域に合った、きちんとした知識をつかう必要があります。

(反対側を指し)例えば、ここに黒いチャルシャフを着たおばさんがいます。ここにも。彼女はピンクのワンピースを着て、スカーフをかぶっています。人目を引いています。二人とも、スカーフをかぶっていて、イスラームのシンボルをつかっていますが、違う使い方をしています。



写真33

【53】Bさん このおばさんは、鼻まで覆っています。周りが見えるように、目だけ出しています。口を見せるのと髪を見せるのは宗教上の罪ということで見せていません、腕を見せるのも宗教上の罪であると言う説もあり、手袋をはめていることもあります。男性とは握手をしません。それも宗教上の罪だと言われています。男女が同じ場所にいることや、椅子に座る前に男性が座っていたらそこに座らないというところまでいってしまいます。しかし、これは知識がきちんとある人には通

用しません。これらは無学からきていることです。

【54】Dさん 服装が似ていない人たちは、よそ者と見なされます。なので、その光景は誤解されるかもしれません。この映像に見られる女性や男性のようなタイプがここで生活しています。伝統主義者ですが、互いに信頼でき親密です。信服し尊重し合っています。どろぼうやレイプなどの犯罪に恐れなくてもいい地区です。



写真34

【55】Bさん ここにも、また別のかぶり方をして  
いる人がいます。しかし、注目に値することは男  
性が自由に好きな服装をしているのに、女性はか  
ぶらなければならないということです。女性を性的  
対象として見なしているということです、女性  
は小さい頃から、スカーフをかぶらなければなら

ないと言われています。男の子には、女の子に近  
づいてはいけない、宗教上の罪だと言い聞かせま  
す。そうすると、男性は好きにできるけれど、女  
性はこのようにスカーフをかぶらなければなら  
ず、働けずお金を稼ぎません。



写真35

【56】Eさん ここはこの地域の生活様式を表して  
いる出版所を兼ねた本屋です。ここで、例えば  
ナーズム・ヒクメット<sup>22</sup>(Nâzım Hikmet)の本は  
見つけれないでしょう。もしあるかどうか聞い

たら、追いかけて回され逃げなければならなくなる  
でしょう。

【57】Aさん ここも、宗教に関する書物が売られ  
ている所です。

22 (Nâzım Hikmet) トルコの左派の詩人



写真36

【58】Cさん この男性は現代風の服装ではなく、シャルヴァール(もんぺのようなズボン)を履き、丸い髭があります。周りを悪い目つきで見回しています。

【59】Bさん ここにアクタル(aktar:香料などを売る店)と思われる店があります。ミスヴァック(misvak)は、預言者マホメットの時代の薪の一部だと考えてください。それを使って歯を磨いていました。その時代には、歯ブラシはありませんでしたので、今でも、歯を磨くときには、それを使うようにと彼らは言われているのでしょう。善行(Sevap)をつむことができると言われます。しかし、そんなことはありません。その時代には、歯ブラシというものがなかったので、それを使っただけです。しかし現在は、テクノロジーが発達し、歯磨き粉もあるし、磨くためにいろんな道具があります。コーランでは知性(知恵、頭)を使い、知識を使い正しいことを見つけなさいと

言っています。考えなさい、学んで理解しなさいと。しかし、彼らはそういうことを気にしていません。その時代に使われた木で、人々に歯を磨かせようとしています。正しくありません。

彼は、頭に黒いタッケをかぶっています。髭にはタイプがあります。シャツを着ていますが、だぶだぶのスポンを履いています。彼には独自の信仰があります。彼の家族や、彼の住んでいる地域には同じような格好をした人がいます。きちんと清潔にできているのであれば髭を伸ばすことに問題はありません。しかし、食事の度に洗って清潔にしておかなければなりません。

【60】Dさん ここで売られている衣服のように、書物も彼らの考えに合った出版物です。この出版物を読まなければならないと感じています。義務だと思っています。その中で同じビジョン、同じ考え、同じ生き方(生活様式)へ次第に到達していったのです。



写真37

【61】Bさん ここは小物売り屋(tuhafiye)です。 ここで、またチャルシャフを着た女性たちが買い  
ここでは、靴下やぼたんや色んな物が買えます。 物をしていました。



写真38

【62】Bさん チャルシャフのおばさんたちがいま  
す。この人のチャルシャフの色が違っていま  
す。多分、別のタリカットに所属しているからでし  
ょう。子供にもスカarfをかぶらせていま  
す。まだ  
5～6歳の小さい女の子です。自分で判断でき  
ない時から、長いスカートをはかせたり、海に入  
ったりするのを妨げていま  
す。自由に男の子たちと  
一緒に遊ぶことも妨げていま  
す。しかしトルコの  
多くの地域では、このようではありま  
せん。私は

子供の時から男の子たちと一緒に過  
ごしていま  
した。家族も、決してそのようなことを私に言  
いませんでした。

ここは、またモスクです。イスラームの国々  
で世界的にモスクはトルコで一番たくさんあ  
ります。8万ものモスクがあるそうですが、そ  
んなに必要ではありません。キリスト教の  
教会で牧師たちがお金を集めるために人々  
に間違った方法をとっているのを妨げるた  
めに、イスラームでは金



曜日の礼拝の時だけ、または特別な日に集めることで知られています。それ以外に、どこでも清潔な所で礼拝ができます。しかし8万ものモスクの必要がありますか。ありません。どうしてこんなにモスクが建てられているのでしょうか。人々からお金を集めるときに「学びたいから」と言ってもお金は集まりません。しかし「モスクを建てるために援助してください」と言った場合、人々の宗教に対する気持ちを利用してお金を集め、モスクが建てられます。寄付をした時には領収書を書かなければなりません、90パーセントそれもない

でしょう。お金がどこに消えたのか、誰にも分かりません。クルバンパイラムで海外に援助するために集められたお金も、どこにいったのか分かりません。記録も文書もありません。どうなっているのでしょうか。きっと誰かのポケットに入っているのです。それを使って、家や車を買っているのです。反対に無学な人たちは、お金を失っていくのです。

【63】Cさん この女性たちはカメラを見たら、全員顔をそむけています。どうしてかという、カメラに映るのは宗教上の罪だと思われるからです。



写真39

【64】Bさん ここはモスクの門です。ここに書かれていることが注意を引きます。これは礼拝の時間です。その日に行われる礼拝のそれぞれの時間です。イスラームでは一日に5回礼拝をします。ところが、ここにある礼拝の数は、本来の数より増やされています。ふつう、仕事に差し支えないよう、お金儲けの妨げにならないように礼拝をすませて仕事に戻りますが、しかし、ここでは、そうなっていません。スンネットの名を使ったり、色んな名前の下に、非常にたくさんの礼拝を人々にさせたりしています。朝の礼拝には2回

のレキャット<sup>23</sup>(rekat)に2回のスンネットが加えられています。朝の礼拝には、2回でいいはずなのです。しかしスンネット(sünnet)だということ、もう2回しなければならないことになっています。合計4回の動作です。しかし、礼拝というのは、あなたとアッラーの間で祈ること、本当にしたいと思うことで、間には誰もいません。何も考えずに無になり祈ります。他人に「私は礼拝をちゃんとしています。あなたはしてないじゃないですか」と、見せるためにするものではありません。そのためにも、他人の目に触れずにしなけれ

23 レキャット(rekat)立拝・伏拝・立て膝拝からなる礼拝の動作で1回、2回と数える。

ばなりません。施しをする際にも、他の人に見られないようにしなければなりません。「右手であげているものを左手は見ない」という言葉があり

ます。左手が気づく前に施しを渡してしまわなければならないということです。



写真40

【65】Bさん このおばさんも、あごもスカーフで隠しています。首を見せないようにするためです。ここで、もっと注目すべきことは、この子供です。まだ8～9歳の子供です。タリカットによって服装が変わり、このようにタッケをかぶせられています。ジェブケン<sup>24</sup>(Cepken)を着せられていてシャルヴァールもはいています。この子供たちは、一般的に朝からコーランの講座に行っています。コーランのアラビア語を学んでいます。しかし、何と書いてあるか分からなくて読んでいると考えてください。そんなことをする意味があるのでしょうか。ただ読んでいるだけです。コーランの講座では、理解せずにただ読ませています。私たちの子供の頃にも近所にありました。しかし、どんな意味なのか分かるように、私たちはコーランをトルコ語で読んでいました。ここでは、ただただ読ませているだけです。その他、行儀作法、他人への接し方、ホジャ(hoca: イスラーム僧)の勝手に作った規則を教えます。現実的でない虚構です。例えば女の子と一緒にいる

な、一緒に座るな、手を握るな、離れていろなどなど。お母さんとでさえ同じテーブルで食事を取らない子供もいます。しかし、ここに映っている子供は8～9歳、いや5歳くらいから異性を宗教上の罪の要素だと思っています。偽りがイスラームの名前の下に行われているのです。

【66】Eさん この子供たちが、どのように育てられたかは明白です。この子たちは、将来どの方向に行くか、どの方向にいかないかが今から分かります。イスラームに基づいた生活をしているのか、それともその特定のタリカットの様式に基づいたものか、分かりませんが、今は思考の発達段階だと思うけれど、洗脳されてここまで来ているのでこれからも自由な意志というものは持てないでしょう。彼らは、疑問に思うことや、新たに何かを考えることはないと思います。彼らは、ただ大人のしていること見たことを繰り返し、多分自分の子供たちにも同じように育てることでしょう。

【67】Cさん このような光景を私はイスタンブル

24 ジェブケン(Cepken)丈の短い上着の一種。

の他の地域でみたことはありません。子供がこのような服装をしているのを見たことはありません。チャルシヤンバ界限にも、今まで私は行ったことはありませんでした。怖いからです。私がタンクトップや半袖の服を着て行ったら、何をされるか分からないと思います。石を投げられるかもしれないし、怒鳴られるかもしれません。全く

行ったことはありませんでしたが、この映像を見てははっきり言って驚きました。またフェス(fes:トルコ帽)もあります。これは縫製された衣服のものからです。シャルヴァールもあります。彼らは、デルギヤー(dergah:修道院、宗派)に属していて、自分たちの集まりのためにこのような服を着ているのでしょう。



写真41

【68】Aさん ここもモスクです。反対側にも、大きなイスマイル・アー・モスクがあります。ご覧になったかどうかは、知りませんけれど。

【69】Dさん 今、門が開いているのが礼拝の場所で、その中にいる代表者たちがこの地区を仕切っています。この地区で暮らしているすべての人々に影響を与え、指導し、思想を与え、人々はそれに同意し、賛同し、受け入れ、敬意をはらっています。この場所の名前は、イスケンデル・パシャ・ジャーミー(İskender Paşa Cami)です。コミュニティの名前もイスケンデル・パシャとして命名されています。現在の指導者もシェイヒ(şeyh:宗派の創始者)と宗教用語で呼ばれている人たちです。ここは、完全に宗教の影響下にあります。

【70】Bさん ここにも、モスクの入口にアラビア語、ビスミッラーヒッラフマーニッラヒーム(bismillahirrahmanirrahim:慈悲あまねく慈愛深

きアッラーの御名において)が書かれています。そして、このモスクはいつ建てられたのか書かれています。イスラームの建築には、その前のトルコの建築にも、このようなことが書かれています。そのモスクや建築が、誰によって作られたのか、どうして作られたのかなどが書かれています。すべての入口に、詩や美しい表現が書かれていることもあります。「慈悲深きアッラーの名において、入りなさい。慈悲深きアッラーの名において始めています。アッラーの名においてしています」とあります。しかし、全てのことに於いて見せかけにするのは、宗教上正しいことではありません。例えば、全てに「ビスミッラーヒッラフマーニッラヒーム、私はこう言っています。見てください。そしてあなたもしなさい」というのは間違いです。押しつけるのは正しいことではありません。お互いに押しつけ合うべきではありません。



写真42

【71】Eさん この頭にあるものは、本来、礼拝するときにかぶるものです。この人が、外でもかぶっているのは、自分は信仰深い、礼拝をしていることを表現しようとしています。コーランには悪い習慣について書かれていないので、彼はタバコをくわえています、それは問題ないのでしょう。彼らにとっては、帽子を見せることは大切なことなのでしょう。何故なら、この地域の人間関係で敵を作らないためなのでしょう。いやそれより、このように条件付けられて育っているのです、こうすべきだと思っているのです。もしこの帽子をなぜ外でかぶるのかと疑問を感じたなら、

この地域で彼の立場は変わってくるでしょう。でも、彼は今、これをかぶっていない人はムスリムじゃない、または十分なムスリムじゃないと解釈するのだと思います。

【72】Bさん ここでは、タッケをかぶっています。モスクに行くのかもしれませんが。または所属しているタリカットのタッケかもしれません。しかしタバコを吸っています。タバコは健康を害するものです。分別があれば健康を害することをしないようにしなければなりません。格好を作っていますが、本来すべきではないことをしています。



写真43

【73】Bさん ここにまたおばさんがいます。パルドゥス(Pardösü：軽いコート)をきてバシュオルトゥスをかぶっています。所属しているグループによって頭を覆っているスカーフの色が違います。例えば、ウルファ地方に行けば男女ともに紫色のものをつけています。彼らの属している一族、部族やタリカットはその色をつけることを推奨しています。黒いチャルシャフ、ボルドーのチャルシャフ、緑色のチャルシャフもあります。しかし、中が見えないようにどれも濃い色です。しかし、こんな話もあります。トルコで、下着を一番たくさん買う女性は、チャルシャフや

トゥルバンをかぶった女性たちで、また、ゴージャスな下着を買うそうです。彼女たちは、普通の女の子たちです。普通に短パンを履かせられています。ちょっと長いですが。これは普通のことです。15～20年前までは、トゥルバンというものはありませんでした。ただ頭に何かかぶって外出していました。髪が見えるのはいけないというようなことは、全て人々に強要するために誰かが作ったことです。かぶらなければ宗教から遠ざかるということはありません。私の周りでは、祖父も祖母もメッカに巡礼に行きました。しかし、私はそのそばで、短パンでいることができていました。



写真44

【74】Bさん ここでもおばさんがスカーフをかぶっています。上着をきていますが、足は見えています。ある人たちによると、足も見えてはいけなようです。男性に性的なことを連想させるからだそうです。最初から、このように教育され

ば子供たちは足が性的なものだと認識してしまいます。さらに、鼻や髪が同じようになってしまうでしょう。ふつうの人の考えとは違ってしまいます。



写真45

【75】Bさん 2人、違った結び方でトゥルバンを被っています。もう1人は白いスカーフです。地域によってスカーフの色が変わることがあります。

【76】Dさん 使っている家具や乗っている車は

ゴージャスでも、無理に時代に合うようにはしていません。しかしこの地区全体で見たライフスタイル(生活様式)はイスタンブールの、またはトルコのどの地域でも見られません。



写真46

【77】Bさん ヒジレット・エレクトリック・マーゼメレリ (Hicret elektrik malzemeleri) と店名にあります。ヒジレット (Hicret) は移住という意味で、ムハンマドがメッカからメジナへ移住したことで、イスラームにとって神聖なものです。本来、このような神聖な言葉を店の名前にするべきではありません。ここで売られているものが、ヒ

ジレットにどのような関係があるというのですか。しかし、このようなことを人々に分らせるのは、難しいかもしれません。

【78】Dさん さまざまな店が映っているこの映像で、注意を払ってほしいものがあります。店の名前が全て宗教用語に関連していることです。店の名前に宗教用語がつけられています。これも彼ら

特有のものです。あえて気をつけてそうしているからでしょう。  
 のです。使わないと恥ずべきことだと思っている



写真47

【79】Bさん おじさんがだぶだぶのズボンを履いて、頭にはタッケをかぶっています。またチャルシャフを着たおばさんがいます。普通に肌を出して歩いている女性もいます。いろいろな人たちがともにいることができます。これはイスラームの特徴です。お互いの宗教に口出しせず、生活の形

に口出ししません。しかし、最近では、例えばバスに乗っていると、周りの人に不愉快な思いをさせる、タッケやジュッペを着た人たちに遭遇します。そういう行為は、イスラームの名前を使った間違った行為で、逆に、人々をしらけさせ、イスラームから遠ざける原因になります。



写真48

【80】Bさん ここに、タリカットのメンバーではなく、ごくふつうにスカーフを被ってパルドゥス

を着て外出している女性がいます。



写真49

【81】Bさん ここにまた、チャルシャフを着た人たちがいます。半袖を着た人たちもいます。しかし、一般に男性は自由な格好をしているのに女性はできません。よく言うのですが、トルコは祖母の方が孫より進んでいるただ一つの国です。母や祖母の世代は、アタトゥルク革命後に誕生した教育を受けた人たちです。ゼロからこのトルコ共和国を作りました。「読む(学ぶ)」ために公民館があったそうです。年老いた人たちのことを考えてみてください。彼らは戦争から戻ったけれど、読み書きができません。オスマン語は、書くのがとても難しい文字なので、ローマ字に変えられました。これを民衆に教えるために公民館が作られま

した。女性は、演劇や絨毯の織り方、刺繍の仕方や洋裁を習います。男性は、同じように読み書きと同様に、例えば大工の仕事などを習いました。その他に、村落センターがつくられました。そこで村の貧しい子供たちをいろいろな職業教育をしました。その時代と現代は、全く正反対なのです。私の両親が自由に海に入れるのに、今では、たとえばシャンルウルファ<sup>25</sup>(Şanlıurfa)や東部地方では、女性は、自由に海に入るところか、短いスカートで歩き回ることもできません。スカートで歩き回ることさえ問題になります。チャルシャンバ界限でも同じです。ここのある界限では、スカートで入ることができないそうです。





写真50

【82】Bさん また、だぶだぶのシャルヴァールをはいて、ヒゲを伸ばした男性がいます。タッケとジェプケンを着ています。あるタリカットのメンバーであり、特定の考え方の持ち主なのでしょう。ここでは、5年前には金曜日に開いている店がありました。今では、ほとんど店が金曜礼拝で閉まっています。今では多くの食堂でアルコールを出さないようになりました。でも15年前は、このようなことはありませんでした。ラマザンでは断食をします。しかし断食は自分の意志でするものなので、しない人を責めることはできません。しかし、ラマザンのときも開いている食堂を見つけることが難しくなっています。イスタンブールでは、まだそういうことはありませんが、例えばエ

ルズルム<sup>26</sup>やカイセリ<sup>27</sup>に行けば開いている食堂はほとんどありません。開けている人たちの店に石を投げたり、政府から圧力がかけたりするのです。例えば、最近ではウシュキュダル<sup>28</sup>ではアルコール販売許可が無効にされました。どんどんトルコが保守化しています。

【83】Dさん ヨーロッパのある宗教的な、あるいは宗教色の濃い小さい町に似て、自分たちの中だけで親しくして、他の人たちをあまり受け入れません。自分たちが変わることを望みませんし、また、他人が自分たちを変えようとすることも嫌がります。自分たちの生活に満足しているのでしょ。ある種の自己完結した街なのです。

26 エルズルム (Erzurum) トルコ東部の都市

27 カイセリ (Kayseri) トルコ中部の都市

28 ウシュキュダル (Üşükdar) イスタンブールのアジア側の地名



写真51

【84】Bさん パンタロンを履きスカーフをかぶり、 シャフを着る必要はありません。他の人からの強請  
普通に歩いているお婆さんがいます。彼女がチャル で、着なければならぬということはないのです。



写真52

【85】Bさん 頭にタッケ、ジュッペ、足にはゴム製の、多分アディダスの靴を履いているのでしょ  
う。手には携帯電話。シンボルとして右手に指輪をはめています。そして銀の指輪をしています。宗教的には男性が金をつけるのは宗教的にハラム(haram: 宗教上の禁制)だと言われています。しかし、そんなことはありません。マホメットは銀の指輪をしていたので、銀の指輪をはめることは

スネットです。それで右の指にはめ、左の指には、はめません。左に指輪があれば結婚していることになりますが、彼らははめません。金の指輪をはめず、銀の指輪をはめ右の指にします。指輪は、本来女性がするもので、とくに金の指輪は、男性がするべきではないと言っています。ところが、一方、最新のテクノロジーである携帯電話は持っています。そんなことを言う人たちなら使わ

ないはずでしょう。しかし、家にはコンビ<sup>29</sup>があり、テレビを見えています。私たちのようにモダンな人たちは、結婚指輪として左の指に指輪をして

いますが、彼らのようなラディカルな人たちの左手指には指輪はありません。



写真53

【86】Eさん 向こう側を通っている子どもも頭に被り物をしています。ここで、一番重要なのは見た目です。外見をその地域社会に合わせなければならぬと思っているのでしょうか。そうでなければ、地域社会の外側に放り出され、ひとりぼっちになってしまいます。彼らにとって、個人になることは、簡単なことではありません。なぜなら、個人になると自分で自由に考えたり、疑問を持ったりする必要がでてくるからです。ここでは、疑問に思っただけで質問するというようなことはありません。そうすることは、ここでは宗教上の罪なのですから。もちろん、本来、それは宗教上の罪ではありません。でも、彼らはそのように教育されているのです。ただ疑問を持たず質問しない人たち、自分自身に納得している人だけが天国に行けるのです。疑問に思い質問をすることで何かに気がつき、頭が働けば何かに気がつきます。この地域社会の中で商売をしている人たち、本屋を開いている人たちなど、金銭が絡んで宗教的な外見をする

必要のある人たちは、ここに住む人々が無知で疑問をもたないことを望んでいます。だから、背後にある金銭的利益がなくなれば、彼らの半数以上は外見を変え、生活様式を変え、信仰も捨てるでしょう。彼らの大半は、この地域社会の中で利益を得るために外見や言動を作っているのです。

【87】Bさん ここにも同じようにチャルシャフを着た人がいます。左は、多分中学生か高校生ぐらいの学生たちです。でも、この子たちは学校に行かずに、コーランの講座に通っているのでしょうか。イスラーム僧が教えていますが、正しくない知識が彼らに教えられていると思います。

【88】Dさん 女性と男性は離れて別々に歩いています。これは宗教的に禁止されているからでしょう。学者たちから教えられたように行動しているのです。男女が一緒に歩いているところは見られません。そして話しているのも見られません。

#### D. 考察と今後の課題

##### 1. 考察

インタビュー対象者が最も頻繁に反応し言及した表象は、映像に登場したイスラーム式の服装を着用した人々であった。

たとえば、女性の服装として可視化されたイスラーム表象には、チャルシャフ、トゥルバン、バシュオルトゥスなどの被り物に関わる表象に対して頻繁に反応し言及した。他にも、女性の服装に関する表象には、パルドゥスなどの衣服が反応と言及の対象となった。男性の服装に関わる可視化されたイスラーム表象には、ジュッペ、サルック、タッケ、シャルヴァールなどの服装に関わる表象が反応と言及の対象となった。また、右指にはめた銀の指輪やスネットとしての特徴的な髭やテスピヒ(数珠)も反応と言及の対象となった。

これらの服装や装身具に対する反応と参照の頻度は高く、またインタビュー対象者の宗教的態度の如何とは関係なく、高い頻度を示した。

つぎに、対象者が反応し言及した表象は、商店の店名や店頭に陳列された商品やその広告／掲示であった。たとえば、該当広告のメッセージであるイラーヒ・アルバム(İlahi albüm: 神を讃える歌のアルバム)、ドゥア・ギイム(dua giyim: 祈りの服)、ヨレセル・ヘラル・エト・ウルンレリ(yöresel helal et urunleri: 戒律で認められた地場産の肉製品)、メッケ・メディーネ・ハジ・パザル・マーゼメスイ(mekke medine haji pazarı malzemesi: メッカ・メディナ巡礼関連用品)、銀行名のクヴェット・トゥルク(Kuvvet türk: イスラーム資本で作られた銀行)、店名としてのヒジレット・エレクトリック・マーゼメレリ(Hicret elektrik malzemeleri)、テセツウル(tesettür)、などが、この街のイスラームとしての性格を特徴づける表象として反応され言及された。

しかし、対象者が反応し言及した表象群の中

で、地域の歴史的構造物に関わる表象は、墓地とジャーミー(イスケンデル・パシャ・モスク)のわずか2つであった。

この結果が暗示するように、この地域において可視化された宗教的表象が、ハードな構築物よりも、むしろ人間の服装や店頭の商品や広告／掲示といった流動性を特徴として持っていることは、イスタンブルのようなメトロポリタン状況にあるムスリム・コミュニティの宗教的景観を構成する要素の重要な特性であるかもしれない。

ただ、今回のインタビューをつうじて、このチャルシャンバ界限におけるイスラーム的な景観が特定のタリカットの影響を強く受けていることが、より明確に浮き上がるようになった。というのも、イスラームに対する宗教的な態度の如何にかかわらず、ほとんどのインタビュー対象者が、このチャルシャンバ界限で見られるイスラーム式の服装に身を包んだ男女(そして子供)が特定のタリカットの影響下にあることを指摘し、自分たちのイスラームとしての宗教的態度と、これらの人々のそれが異質であることを指摘したからである。対象者の中には、これらチャルシャンバ界限で独特の服装に身を包んだ人々の宗教的態度を厳しく批判する人もいたし、あるいは、批判しない場合でも、これらの人々をすくなくとも自分たちとはライフスタイルが異なる他者とみなしていることを控えめに告げる人もいたのである。

ただ、はっきりと言えることは、このチャルシャンバ界限におけるイスラームの可視化現象が、たんに特定のタリカットの飛び抜けた振る舞いによるものであるというより、ムスリムとしてのアイデンティティを強めようとしている今日のトルコ社会の鮮やかな時代的現象の1つであるという認識を、(肯定的であれ、否定的であれ今回のインタビュー対象者に代表されるような)ごく普通のイスタンブルの市民たちが共有していることであった。このことを今回の調査で明らかに

なった総括的な知見としておくこととしたい。

ところで、インタビュー対象者のイスラームに対する態度と彼／彼女が参照した表象群との関係もみておきたい。ただし、これについては、量的分析が今回の調査の目的ではないため、あくまでも印象評価に留まることを断っておく。

まず、インタビュー対象者の、イスラーム式の服装を身にまとうことについての態度が消極的であるからといって、彼／彼女の信仰心が薄いわけではない。

つぎに、イスラーム式の服装の着用について批判的な態度を持つインタビュー対象者は、映像においても、登場する人々の服装について反応し言及する傾向が強かった。

さらに、イスラーム式の服装の着用について批判的な態度を持つインタビュー対象者は、映像に登場するイスラーム式の服装を着用している人々が、携帯電話を握っていたり、モダンなブランドのサンダルを履いていたりした場合、それを服装との不一致として否定的に評価する傾向があった。同様に、イスラーム式の被り物(とくにトゥルバン)を着用している女性がブランドの小物を持っていたり、身体のラインがはっきりと現れる衣服を着ていたりしたときも、否定的に評価する傾向を示した。

## 2. 今後の課題

本報告で明らかになったように、街頭景観を構成する宗教的表象として、停留し行き交う人々の服装がもつ訴求力の相対的な大きさに、あらためて注目をする必要があるように思われる。このような問題意識を持続しながら、本研究プロジェクトの最終年度である2014年では、可視化する宗教／エスニック・アイデンティティとして、さらに服装をターゲットに絞り込んで、研究を進めることにしたい。

## 参考文献

- Akalın, Haluk(Haz), *Türkçe Sözlük*, 10.bs., Ankara, Atatürk Kültür, Dil ve Tarih Yüksek Kurumu, Türk Dil Kurumu Yayınları, 2005.
- Devellioğlu, Ferit, *Osmanlıca Türkçe Ansiklopedik Lugat*, 26. bs., Ankara, Aydın Kitabevi, 2010.
- 山中速人、井藤聖子「都市における宗教的表象と地域のアイデンティティ～イスタンブール(トルコ)における街頭映像の記録と分析～」『総合政策研究』43号、2013年、pp.83－105.